

武生大仏の研究

- 東アジアの伝統的鑄造技法で造られた最後の大仏 -

菅谷文則^(＊1) 伊妻智音^(＊2) 小堀孝之^(＊3) 武澤喜美子^(＊4)
三船温尚^(＊3) 武笠 朗^(＊5) 清水克朗^(＊3)

1. 調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三船温尚

日本の大仏といえば、飛鳥大仏、奈良東大寺大仏、鎌倉大仏などが直ぐに思い出されます。これらは全て青銅合金の鑄造製で、当時の工人達は苦勞して巨大な仏像を組み上げていきました。やがて、明治期になると青銅製の大型像(以下「銅像」)製作に欧米のボルト締め技法が取り入れられ⁽¹⁾、更には、欧米、ロシアで発明された溶接技法が、大正期から昭和初期にかけて銅像の溶接に応用されるようになります⁽²⁾。これらの新技術を活用して、その後、巨大な青銅の仏像や銅像がさかんに作られるようになります。こうして見ると、新技術が導入される以前、すなわち明治期以前の大仏像は、東アジア地域に伝統的に伝わってきた鑄造技法で製作されたといえます。江戸末期、幕末にこういった技法で作られた総高5mを越す鑄銅大仏(蓮台高さ1.33m、像高3.16m、光背までの総高5.06m)が、福井県武生市の月光寺にあります。この武生大仏は、いわば伝統的な東アジアの製作技法で作られた最後の大仏だといえます。

日本列島の鑄造技術は、弥生時代になり韓半島南部から北九州にもたらされます⁽³⁾。その後、百済からの渡来系鑄造技術者によって飛鳥大仏や奈良東大寺大仏が作られます⁽⁴⁾。12世紀になり、東大寺大仏修理に中国の鑄造技術者を招き、この大型鑄造技術が、13世紀の鎌倉大仏製作へと伝わり、やがて日本国内に大型銅像を作る技術が広がって行ったと考えられます。

東アジアの大型銅像を見ると、中国四川省三星堆遺跡から近年出土した2mを超える立人像や巨大な仮面があり、これらはおよそ三千年前に作られたと言われています。そして、この三星堆の銅像と武生大仏の製作方法を比較してみると、驚くことに多くの共通する点があります⁽⁵⁾。すなわち、三星堆から武生大仏までの三千年近くの間、東アジアの大型銅像製作は、広い地域に伝播し、近世まで、古代と変わらない方法で脈々と続けられて来たこととなります。

武生大仏は大型銅像鑄造技術史のうえからこれほど重要であるにもかかわらず、その存在は一般にほとんど知られてきませんでした。筆者自身、高岡鑄物の文献で、偶然に武生大仏を目にして、初めてその存在を知ったほどです。そして、すぐに月光寺へ連絡し、この研究調査が始まりました。

この研究は、福井大学の故・鈴木朝生、杉山聡理、武生市役所の林 憲司、高岡短期大学の小堀孝之、清水克朗、三船温尚で準備を進め、2000年7月26日に第1回の調査を行いました。その後は、主に高岡短期大学学長裁量経費を得て、複数回の調査を進めてきました。これまでの調査内容は、大仏の各部の計測、胎内観察、胎内石の撮影、大仏の撮影、大仏の図化計測などです。今後は、武生大仏の本格的な鑄造技法の調査や科学的分析を進め、そして更に、東アジア地域の大型鑄造技法変遷の調査研究に取りかかる計画です。

(＊1) 滋賀県立大学 (＊2) 月光寺 (＊3) 高岡短期大学 (＊4) 高岡市美術館 (＊5) 実践女子大学

2. 近世までの中国と日本の大仏

(1)中国の大仏 - 予報的な報告 - 菅谷文則

日本の東大寺金堂は、一般に大仏殿といわれ、その本尊の盧遮那仏は大仏といわれ親しまれています。中国でも大仏寺や大仏の名称が一般に用いられていて、その正式の寺号を知ることができなかったものもあり、本報告までに明確にしたいと考えています。大仏は各種の素材で制作されています。銅、鉄、木材、塑（胎は判らないものもある）、摩崖仏、石窟仏（石窟の中に岩層を掘り残した岩胎で仕上げたもの）、丸彫石仏など種々様々です。素材と開眼時期と地域には少なからず関連があるように見えます。中国の大仏を以下の一覧表に示します。

A. 石胎（石窟寺院）

省別	名 称	年代	高さ	備 考
四川	楽山凌雲寺大仏（椅坐）	803	71	岩盤掘り出し
甘肅	甘谷県大像山石窟	唐	38	岩胎塑仕上げ
四川	荣県大仏寺大仏	1085～92	36.67	摩崖仏、蜀第2大仏
四川	潼南大仏寺大仏	唐	27	岩胎塑仕上げ・清代補修
甘肅	炳靈寺大仏（171窟）	唐	27	岩胎塑仕上げ
甘肅	敦煌・北大仏（96窟）	695	33	岩胎塑仕上げ
甘肅	敦煌・南大仏（130窟）	865	26	岩胎塑仕上げ
甘肅	天梯山石窟（13窟）	晩唐	26	岩胎塑仕上げ
四川	江津県 石門大仏	明	23	？
寧夏	須弥山石窟大仏	初唐	21	岩盤掘り出し
甘肅	敦煌・北大仏（95窟）	695	33	
西藏	拉梢寺大仏	559	20	年代は不確定
陝西	彬県慶寿寺（大仏寺）大仏	715	18.5	岩盤掘り出し
河南	竜門奉先寺大仏	675	17.14	岩盤掘り出し・則天武后発願
山西	雲崗19号石窟	北魏	16.5	岩盤掘り出し
甘肅	敦煌158窟涅槃仏	唐	16	塑で仕上げ
甘肅	麦積山阿弥陀仏	唐	16	
浙江	紹興石仏寺大仏（13窟）	隋	15	石材掘り出し
山西	雲崗20号石窟	北魏	13.7	1695年補修
浙江	天竜寺阿弥陀三尊	1392	9.36	木材との記述もある
江蘇	徐州雲竜山石窟大仏	梁	10	
山東	大仏寺大仏	唐	9.09	
山東	歴城県仏慧山大仏	1035	7.8	
山東	青島博蔵 北朝大仏2体	北魏	約5m強	石材丸彫では最大

B. 銅仏（金銅仏を含む）

省別	名 称	年代	高さ	備 考
香港	宝蓮寺大仏	1989	26 4	鉄骨に銅板をとめる
西藏	札付倫布寺 弥勒仏	1914	22 4	26 2 mの数字もある（全高）
河北	隆光寺大悲閣 千手千眼観音	964	22	
内蒙	五当召寺 銅仏	1749	10	
内蒙	五当召寺 宗喀巴像	1749	9	
北京	万仏延寿寺 千手千眼観音	1572	8	
北京	万年寺 晋賢菩薩像	明代	7 4	
四川	峨眉山万年寺	980	7 3	
北京	十方晋賢寺 十一面観音	1321	5	57 屯 臥仏
甘肅	五泉山引寺 銅仏	1370	5	

注意 青海塔爾寺宗喀巴金銅大仏も大きい（数字は暫時未入手）
非仏教では、秦始皇帝の金人12体が大きい

C. 木仏

省別	名 称	年代	高さ	備 考
河北	熱河 晋賢寺 文殊菩薩	1755	22 23	
河北	熱河 殊像寺 文殊菩薩	1774	10 00	
山西	淨因寺（大仏寺）大仏	明代	9	材質については石という記述もある

注意 熱河には更にありそうである
5 mクラスは多いようである

D. 鉄仏

場所	大 仏 名	年代	高さ	備 考
山西	汾県 大雲寺 仏頭	唐代	6	胴部を欠く巨仏である

注意 3 ~ 4 mのものは多いようである

E. 塑像（木芯その他の芯（胎）がある）

場所	大 仏 名	年代	高さ	備 考
甘肅	張掖 大仏寺（臥仏寺）大仏	西夏	34 5	臥仏、彩色美しい
天津	薊県 独楽寺 十一面観音	984	16	木芯
山西	五台山 殊像寺 文殊菩薩	1487	9	木芯
遼寧	義県 奉国寺（大仏寺）大仏	1020	8	木芯

石窟寺院は新疆、甘肅、寧夏、陝西、山西、四川に多く分布していて、いわゆるシルクロード沿線に巨仏が作られました。北魏から唐代に至るものが多くあります。雲崗19号窟は北魏の大同定都の早い段階のものです。巨大な仏像としては、パーミヤンの西大仏と前後する時期のもので

す⁽⁶⁾。巨大な大仏は唐代に入ってから、再び西進して、敦煌、天梯山、須弥山、彬県などに石窟仏を作りあげました。四川省の楽山も同じことです。いわゆる仏教伝来の道に沿いますが、中国本土からの波及でした。キジル石窟については、別途に考える必要があると思います⁽⁷⁾。

第2段階は武則天による洛陽奉先寺大仏の完成です。教義上の盧遮那仏です。上記した石窟は北魏以降に開窟されましたが、巨大な大仏の多くは700年代の後半以降に作られました。唐代仏教の振興と関係があると思われます。唐武宗による会昌の廃仏政策中にも、各地で巨仏が造営されていたことの意義は大きいといえます。

唐代末期以降に、鉄や銅を用いた大仏があらわれます。鉄仏では鉄産地である三晋の臨汾県大雲寺仏塔が、胴部以下を欠くも6mもの巨仏です。唐代の原作といわれています。鉄仏は元代から明代まで盛んに製作されました。銅仏では、河北省隆光寺千手千眼観音と、四川峨眉山万年寺晋賢菩薩が古く、かつ大きいものです。銅仏は、20世紀に入ってからでも製作されつづけられていました。仏教寺院や道観には銅塔や金閣(実は金銅)も多くあります⁽⁸⁾。木彫仏は、山西と河北・熱河に大きいものがありますが、古いものはないようです⁽⁹⁾。

尊像の名称や儀軌、所依の經典については紙数の関係で省略します。

(2)日本の大仏・・・・・・・・・・・・・・・・・・武笠 朗

ここでは、文献に知られる事例や現存作例から、日本の大仏を検討します。大仏と呼ばれた像を検討し、素材の問題等どのような像が大仏と認識されていたかを考えてみます。

『二中歴』や『拾芥抄』(ともに鎌倉期編纂の有職故実の類従書)には、日本国内の「三大仏」として、東大寺、河内知識寺、近江世喜寺(関寺)の大仏をあげています。まずはこの三像を中心に中世以前の大仏事例を見ていくことにします。

東大寺大仏

大仏殿(金堂)の本尊銅造盧舎那仏坐像です。聖武帝発願で、天平勝宝4年(752)4月9日に開眼供養がなされました。頭部が江戸時代の後補ですが、現在の像高は14.87m(曲尺4丈9尺)、造像時の大きさは坐高5丈3尺5寸(16.21m)でありました(『大仏殿碑文』)。

知識寺(ちしきじ)大仏

知識寺は、聖武天皇がこの寺の盧舎那仏を拝したことをきっかけに大仏発願に至ったことで知られています。寺址は現大阪府柏原市にあります。『扶桑略記』応徳3年(1086)6月16日条によれば、この日知識寺は顛倒し「捻像大仏」は悉く破損したといえます。この大仏を聖武天皇の見た盧遮那仏とみたいところですが、『扶桑略記』は「長六丈観音立像」としており、尊名を確定できません。いずれにしても、大きさ6丈の立像(約18m)で、「捻像」すなわち塑像であったようです。

関寺(せきでら)大仏

関寺(世喜寺)は逢坂関の東(現大津市)にあった寺です。その創建は不明ですが、天延4年(967)に「関寺大仏」が破損し、その再興造像が仏師康尚によってなされ、治安2年(1022)に五

丈の弥勒仏が造られました(『関寺縁起』『扶桑略記』『日本紀略』)。「関寺大仏」と呼ばれて広く信仰されたこの像は、5丈(立像で約15m、坐像で7.5m)の弥勒仏で、木彫像であったようです。

河原院(かわらのいん)大仏

『日本紀略』長保2年(1000)4月20日条によれば、この日僧仁康が「河原院大仏」を人力で祇陀林寺に移し、京中の貴賤がそれに結縁したといいます。この像は、正暦2年(991)3月18日造立の康尚作丈六釈迦如来像で(『日本紀略』等)、木造であったとみられます。知られている中世以前の大仏事例の中で唯一の丈六像です。大きさは立像で像高約5m、坐像で約2.8mほどと思われる。

雲居寺(うんごじ)大仏

京都東山の現高台寺辺にあった雲居寺に、天治元年(1124)7月19日、金色八丈阿弥陀如来像を本尊とする証応弥陀院が供養されました(『百鍊抄』)。雲居寺大仏と呼ばれたこの像は、坐高4丈(約12m、立像換算で8丈)の銅造阿弥陀坐像であったようです(『梅花无尽藏』『東寺私用集』)。

鎌倉大仏

現存する高德院の銅造阿弥陀如来坐像です。像高は11.39m、曲尺3丈7尺6寸です。著名な割にその制作事情に不明な点が多いのですが、一応、『吾妻鏡』に建長4年(1252)8月17日から鑄始めたとする「金銅八丈釈迦如来像」に当たるものとされます(釈迦とするのは誤記・写か)、約3丈8尺の銅造阿弥陀坐像です。

京都大仏

豊臣秀吉は天正14年(1586)に京都東山に方広寺と大仏の造立を思い立ち、奈良の仏師宗貞・宗印兄弟に像高16丈(坐像で8丈か)の釈迦大仏を造らせました(『太閤記』)。像は文禄4年(1595)に完成しましたが、同年の大地震で漆膠像の大仏は破損し、遺志を継いだ秀頼が銅造での再興を試み、これがようやく慶長19年(1614)頃に完成をみました(大きさ6丈3尺に変更)。この銅大仏がいわゆる京都大仏です。この像は寛文2年(1662)に破損し、その後再興破損を繰り返し、最終的に昭和48年(1973)の大仏殿火災で堂とともに失われました。

以上の大仏事例を見てくると、日本の大仏について次のような概念が得られます。

まず像種は、知識寺が曖昧なのを除けば、他はすべて仏(如来)です。菩薩像を大仏と呼んだ事例は知られません。

次に大きさですが、大仏と呼ばれた作例の多くは、鎌倉大仏の約3丈8尺を最小にそれ以上です。丈六像も一例だけ知られましたが、大方はその倍以上の像でした。記録上は、殊に院政期に丈六像が数多く作られたことが知られますが、それらが大仏と称された例は確認できません。おおそ近世初期までは、丈六をはるかに超える大像を大仏と認識していたようです。また、ただ単にその大きさを満たせば大仏と呼ばれたかという点必ずしもそうではないようで、霊像として尊崇され、その存在が有名になる過程で大仏と呼ばれるようになる例が多いようです。

大仏の素材の問題は、結局仏像自体の素材選択の問題になります。仏像の素材は、基本的に恒久性を旨としつつ国や地域で入手しやすい素材が選ばれます。それを超えて、大仏としての素材

選択の特殊性を指摘するのは困難ですが、東大寺像がそうであるように銅造が最も重視されたことは確かで、あとは造営経費や労力、あるいは時代の素材の好みの問題で、木造や塑造も行なわれたと考えられます。

近世的「大仏」の登場(武生大仏の位置)

近世以降になると大仏の概念も俗化して拡張し、特に大きさの概念が揺らぎます。その典型例がいわゆる「飛鳥大仏」でしょう。通称飛鳥大仏、すなわち奈良・安居院銅造釈迦如来坐像は、日本で最初の本格的仏教寺院である蘇我氏の氏寺法興寺(元興寺)の創建時の本尊です。像は現状大半が後補ですが、その像高は275cmで丈六像に当たります。中世までは大仏とは呼ばれえなかったとみられる丈六像であるこの像が、いつから飛鳥大仏と呼ばれるようになったのかははっきりしませんが、本居宣長の明和9年(1772)3月の吉野花見紀行である『菅笠日記』に「大仏と申して。大きな仏のおはするは。丈六の釈迦にて」とあり、これが一つの目安となります。おそらくは、近世以降に、この程度の大きさでも大仏とみなす認識が広まり(もともと丈六でも十分に大仏と呼びうる大きさです)それが飛鳥大仏の名をもたらししたものと思われます。

そうした近世における大仏概念の変容が、地域の古くから信仰を得ていた大きめの像を「大仏」と称して霊像化したり、新たな信仰・名所の創造として意識的に新しい大仏を作ったりする風をもたらししたものと思われます。武生大仏はこの後者による造像でしょう。それは近世から近代の、しかも日本各地での一般的な傾向であったようです。日本各地に多く知られる大仏の多くは、この近世以降の大仏概念の変容によって生み出されたものと思われます。

最後に、管見に触れた各地の大仏の中から、近世以前に作られた古仏が近世以降に大仏と呼ばれるようになったとみられる作例(A)と、江戸期に作られた像で、大仏として作られたか、あるいはその後大仏と呼ばれるに至ったとみられる作例(B)をあげておくことにします。

(A)

- ・会津大仏 福島県喜多方市・願成寺阿弥陀三尊像、木造・漆箔、阿弥陀像高240cm、鎌倉時代(13世紀前半) 国指定
- ・多々良大仏 山口県防府市・辻福寺阿弥陀如来坐像(来迎印) 木造、像高不明、平安後期～鎌倉前期、重源関係の伝承

(B)

- ・九品寺大仏 東京都台東区花川戸・九品寺阿弥陀如来坐像(来迎印) 銅造、像高不明、万治3年(1660)作
- ・天王寺大仏 東京都台東区・天王寺、合掌仏坐像、銅造、像高不明、元禄3年(1690)作
- ・長沼の駒形大仏 千葉市・長沼駒形観音堂釈迦(?)如来坐像、銅造、像高236cm、元禄16年(1703)造立、市指定
- ・鎌ヶ谷大仏 千葉県鎌ヶ谷市、禅定印(?)仏坐像、銅造、像高1.8m、安永5年(1776)鋳師多川主膳作、市指定
- ・日本寺大仏 千葉県鋸南町・日本寺薬師(?)如来坐像(左手に薬壺) 石造、総高31.05m、天明3年(1783)完成
- ・岐阜大仏 岐阜市・正法寺釈迦如来坐像、竹骨塑土経本貼付け・漆箔、像高13.7m、天保3年(1834)完成

3. 大佛さまのこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊妻智音

月光寺は大佛山月光寺元銅佛庵と称して永正年間に創立しました。その後、この庵は焼失します。天保年間(1830～1844年)に起こった大飢饉により武生及びその周辺で餓死した三千人余の人達を供養する為、富山県高岡の23歳の鋳物師藤田勘右衛門が弘化3年(1846年)日野川の川原で大佛様を製作し現在の地に建立したと伝えられています。当時、大佛様は雨ざらしの露座で、この地は武生の町外れに当たり、旅に出る人帰る人が無事を祈り、この大佛阿弥陀如来様に感謝をして挨拶をされたそうです。露佛ではあまりにも「勿体ない佛様」だと云う事で、現在の月光寺は明治13年(1880年)引接寺御山主、今川良順上人が隠居寺として佛様に合わせてお堂を建立されたものです。寺は道路に近く、戸を開くと目前に驚くほど大きな銅製の阿弥陀如来様が現れ、積み上げられた石垣の上に鎮座しておられます。蓮台から頭頂まで約5メートル余りで、穏やかな顔つきの佛様です。

わたくしは平成元年に月光寺住職のご縁をいただき、現在まで奉仕の方々のご協力に依り毎年7月と12月に大佛様の掃除をさせていただいております。お蔭様で真っ黒だった大佛様が、今では作られた頃と同じようにも見えるほどつややかに光輝いております。平成5年の掃除の時、佛様があまりにも動くので背中の方から入り胎内を調べましたら、露佛であった時に入った雨水が佛を支える栗の木の根元を腐らせ修理をしなければならなかったことが分かりました。大工の方に修理の胎内調査をしていただきましたら、土の中から顔や手足の無い佛3体と法名や戒名が墨や漆で書かれた石が532個出てきました。現在文字が少し薄くなっているものもあります。これらの石を佛と思い幾度も洗って布でふき、胎内に戻しました。この時、石を元の土中に戻すのでは息ができないように思え、胎内の土の上にセメントモルタルで床を作り、般若心経百巻を書いた新たな小石を並べ、その上に532個の石を置いて納めています。セメントモルタルの床には1箇所の三角形の穴と、新たに補強に入れた4本の栗の木の柱の周辺に隙間を設け、完全に塞いで床下が息苦しくならないようにしました。佛3体は顔や手足を造り修復をさせていただき納めました。

胎内にこれらを納める時、電気の明かりを灯すと耳や鼻から光が外に漏れて見えました。このように、生きている人間の声を耳で聞き、鼻で息をしておられるあらたかな佛様でございますが、一般的にその存在が知られておりません。それでもこの頃は、小学生、中学生の学習で訪問しその子供の口から親に伝わり、あるいはインターネットで調べて、当寺に来られる人が少しずつ増えています。こんなに素晴らしい佛様がおられたと感動して帰られる人たちを見て、さらに多くの方々に当山月光寺の銅大佛阿弥陀如来様にお参りいただけることを願っております。

明治13年堂宇を建立して120余年の年月、歴代住職がこれを守り続けてきました。建物は老朽化が進み雨漏りが各所に出はじめ、昨年に大屋根の修理工事をいたしました。美しい佛様と美しくなった寺に多くの参拝者が来られ、あらたかな佛にご縁がありますよう、お待ちいたしております。

合掌

4. 武生大仏と高岡鑄物・・・・・・・・・・武澤喜美子

(1) 幕末の鑄物師藤田勘右衛門

明治41年(1908)高岡市役所編の「高岡史料」に、弘化2年(1845)5月、23歳の藤田勘右衛門が越前敦賀の大仏を製作し、大いに高岡銅器の名声を高めたことが記録されています。

また大正4年(1915)発行の「敦賀郡史」および昭和31年発行の「敦賀市通史」によれば、武生大仏は敦賀郡鑄物師村の鑄物師河瀬基右衛門方で鑄造されたことになっています。河瀬家は江戸時代正徳頃より名が出てくる鑄物師で、世代が変わるごとに清涼殿鉄燈籠を造進する由緒ある家系であり、幕末頃には大砲玉も鑄造し、帯刀を許されました。この基右衛門が高岡鑄物師と関係があったことは、彼の名の入った大砲の図面が、高岡に伝わっていることから推察できます。一方、昭和9年発行の「福井県南條郡史誌」に、武生大仏について「鑄造師鑄物師村住(高岡の人)」と記されています。

以上のことから大仏鑄造を依頼された河瀬基右衛門は、高岡の藤田勘右衛門を鑄物師村の自宅へ招き、大仏は弘化2年から3年にかけて完成したことがわかります。

ところで藤田勘右衛門は代々の高岡鑄物師の家系に生まれ、「高岡史料」には、勘右衛門が若い頃より銅器製作に従事し、図案の研究に熱心であり、精巧な仏像・燈籠・花瓶・火鉢等を鑄造したとあります。彼は弘化2年完成から15年後の万延元年(1860)に跡目相続し、明治7年(1874)亡くなりました。今のところ大仏以外に彼の確実な作品は発見されていません。

この頃、高岡では鑄物師が城端善徳寺の燈籠や山門柱蔽を鑄造し、銅器商人が越後・飛騨・秋田・仙台・大阪に販路を拡大、大阪境奉行所管下へ塩釜の販路を開いています。やがて海外にも販路を広めるようになり、江戸末期には横浜の外人居留地に進出して、欧米に輸出するまでに発展しました。明治維新後、町人を顧客とする高岡の金属工芸はますます発展しますが、明治期の活躍の場は、主に内外の博覧会でした。ウイーン万国博をはじめとした海外博や内国勸業博に出品し、毎回多くの賞を獲得、そのほか多数の共進会などに積極的に参加しました。

鑄物師藤田勘右衛門の養子になった奈部嘉平の次男は、弘化3年射水郡横田村に生まれ、第2回内国勸業博覧会(明治14年開催)や各種共進会などで、多くの賞を獲得、また明治19年には、大本山総持寺祖師堂の台灯籠を製作し、高岡銅器の名声を高めました。

(2) 現在の高岡鑄物

高岡銅器の種類は銅像・置物・花器・文房具・仏像・仏具など多岐にわたり、一方、高度経済成長期に伝統的鑄造法や着色技法に加えて近代的な技法が画期的に進歩しました。そして国・県指定重要無形文化財保持者、工芸産業技術保持者・伝統工芸士など優秀技術者の顕彰と後継者育成事業が強化され、ハイテク導入による省力化と新設備・新技術の開発や異業種交流を進めることによって高岡銅器の生産額・販売額が急増しました。しかし最近の不況で生産額・販売額が激減し、新たな産業体制の構築が模索されています。

5. 武生大仏の胎内

(1) 奈良、鎌倉、武生大仏の胎内比較・・・・・・・・・・小堀孝之

奈良東大寺の大仏の建立は奈良時代後半8世紀、天平19(747)年に始まり、9年の歳月を費や

し、鑄造終了は天平勝宝 8(756)年であるといわれています。奈良東大寺の大仏研究に関しては岩波書店より「東大寺大仏の研究」が解説編および図説編として刊行されています⁽¹⁰⁾。これは東京藝術大学の研究グループによる、美術史および鑄造技術の見地からの報告になっています。筆者も学生時代、助手として実際にこの調査に参加し、借用した麻製の真っ白い作務衣とわら草履を履き、全身汗まみれになりながら、暗い胎内を手探り状態で、観察した経験があります。このような調査でなければ奈良大仏の胎内に一般の人が入ることは、まずあり得ないことだろうと思います。大仏背面にある出入り口に梯子をかけて胎内に入ると、腹部から下は中型の土が残り、その上に石段が数段あります。あたかも木造建築の天井裏のような太い角材の木組が縦横にあり、大仏を内側から支える構造になっています。もちろん内部は真っ暗で懐中電燈の明かりだけがたよりの観察になります。

大仏は創建以来二度被災し、何回となく修復が繰り返されています。それぞれの時代の鑄造作業が、いたるところに垣間見られ、複雑に折り重なっています。天平創建期の銅の肉厚は、薄いところで3センチ、厚いところでは約11センチにもなります。胎内から見ても、鑄継ぎの痕や、補鑄の鑄造の裏側等が生々しく、たった今鑄込まれたようにも見えます。それらからは各々の時代の技術だけではなく、工人の気持ちまでもが判るように思えてきます。

座高約16メートル、総重量380トンといわれる、この世界最大級の鑄造物は今から約1250年前、人々の英知と情熱と祈りによって、国力全てを傾けた国家的プロジェクトとして生まれました。この仏像自体まさにその時代の象徴だったと言えます。電気もガソリンもない時代に、我々の先人は一体どういう気持ちでこれを造りあげたのでしょうか。

鎌倉高德院の阿弥陀如来坐像、通称鎌倉大仏は、奈良大仏が聖武天皇(701~756年)による国家的プロジェクトであったのに対し、新時代の東国武士による、また大衆の願望と僧浄光の勸進による造営でした。記録には、建長4(1252)年、河内鑄物師大工、丹治久友、鑄造開始とあるだけで、何時完成したかなど詳細は不明になっています。完成した後も大風や大地震による海水の進入等で大仏殿が倒壊し、かなり以前から今のように露坐のままの雨ざらし状態でした。

奈良大仏に比べるとやや小柄で、座高11.44メートル、総重量120トンとされています。現在、胎内も一般観光客に開放され誰でも自由に内部観察ができます。明治、大正、昭和と修理が繰り返され、背中の大きな2枚の扉からの光で内部も明るく、実際に手で触る事も可能です。技術的に高度な鑄繰くりがされ、青銅の材質は奈良大仏よりはるかに錫や鉛の比率が高く、大陸との交流も考えられ、宋銭等が溶解されている可能性が指摘されています。

武生大仏は数少ない幕末の大型鑄物で、調査も今年で3年目になります。500個を越す胎内石の撮影調査に手間取り、鑄造技術調査はまだまだ進展していません。武生大仏は奈良、鎌倉の大仏に比べると決して大きいとは云えませんが、日本の鑄物技術史を知る上で重要なものです。胎内には背後の扉からまるで転がり込むように入っていきます。内側には外からの光が所々漏れ入り、この大仏の組み上げ方が垣間見られます。そしていかにも幕末の鑄物らしく、内部は綺麗な鑄肌になっています。

現在、内部台座の部分は漆喰のようなもので固められていて、河原の石に墨書、漆書きされた奉納石が丁寧と並べられていました。本格的な大仏本体の鑄造技術調査はこれからになります。

(2)大仏様の中に納められた石について・・・・・・・・・・清水克朗

武生の大仏様の胎内には532個もの石が納められています。これらの石は飢饉で亡くなられたであろう方々の戒名が書かれており、ご位牌となっています。石の種類や大きさはまちまちです。一番大きなものは大人の握り拳くらい、小さなものは里芋くらいの大きさです。多くは平たい形をしていて、表裏両面に字が書かれています。中には三角柱のような形で三面に書かれているものもあります。文字の多くは墨で書かれています。長い年月により、文字が薄くなって読めなくなってしまったものもあります。文字が全く消えてしまった石もありました。中には、漆で書かれた光沢のある文字のものもあり、これらは今でも明瞭です。

大仏様の裏手を流れる日野川の岸辺に行くと、似たような形、色の石を、たくさん見つけることができました。きっと大仏様の中に納められている石も、この付近の石なのでしょう。

7. 今後の調査研究の展望・・・・・・・・・・小堀孝之

日本における鑄造技術の源は遠く中国大陆にあり、朝鮮半島を経て我が国に到ったことは疑いを持ちません。我々鑄造技術者は鑄造文化に興味を持ち、その歴史や技術の解明をおこない、次の世代の人達に伝える必要があると思っています。そういう視点から、ここ数年、我々は他の研究機関と共同で、古代青銅鏡の調査や成分分析、あるいは実験鏡を使つての焼き入れ、破壊実験等を繰り返してきました。また、中国山東省や朝鮮半島の古鏡調査や、近畿、九州、関東、北陸での国内調査に足を運んできました。

昨今、鑄造技術もいろいろと進歩し、少し昔の技術さえも分からなくなってしまうことが多々あります。我々の文化のルーツが中国、韓国にまたがり、両国がまるで父母のような存在であることは自明の理ではありますが、それ以上に我々自身の歴史を深く知らなければなりません。そういう意味からも、この幕末の鑄造物である武生大仏の研究は、我々北陸にある者の努めであるとさえ思えます。

今のところ、この大仏の歴史的背景や高岡の鑄物職人との関連、鑄造技術など断片的に分かっているだけです。現在、調査は始まったばかりで、大仏の原型製作法や鑄造方法、組み上げ方法などの精査は今年度以降になり、これらの詳細な解明は数年後になります。今後の更なる調査結果を得て、月光寺や、武生市のみなさまに良い調査報告が出来る事を願っています。

<脚注・引用文献>

- (1)中牟田佳彰、田中一幸「福岡市東公園 日蓮上人銅像・製作工程と歴史資料」西日本新聞社、1986
- (2)手塚敬三「溶接のおはなし」日本規格協会、1981
- (3)後藤 直「弥生時代青銅器鑄造技術に関する日韓比較による実験考古学的研究」三菱財団研究助成金成果報告書、2002
- (4)朴 鐘鳴「奈良のなかの朝鮮」明石書店、2000
- (5)稲畑耕一郎、岡村秀典、徐 朝龍「三星堆 - 中国5000年の謎・驚異の仮面王国 - 」朝日新聞・テレビ朝日、1998
三船温尚「三星堆の青銅鑄造技術」『扶桑與若木 - 日本学者对三星堆文明的新認識』三星堆文明叢書(北京大学中国伝統文化研究中心国学研究叢刊之十五)所収、巴蜀書社 pp.55 - 89, 2002
- (6)バーミヤンの西大仏の製作年代は諸説あり確定していない。通説の5世紀とすると雲崗石窟、曇曜五窟(十六~二十窟)とほぼ同じ時代となる。
- (7)キジル石窟は、やや古く、キジルが仏教の中心であったので、一概に東方からの波及とは言えない。
- (8)金閣として名高いのは五台山清涼寺の金閣である。圓仁の『入唐求法巡礼行記』にも実見記があり、わが国でもよく知られていた。
- (9)付表は、各種図書、なかでも国家文物事業管理局主編『中国名勝詞典』1981年によったところが大きい。
- (10)前田泰次、西大由、松山鉄夫、戸津圭之介、平川晋吾「東大寺大仏の研究」岩波書店、1997



武生大仏正面全景(カメラ位置を大仏腹部の高さに上げて撮影したもので、普段この角度から拝観することはできない)



大仏頭部(通常の拝観角度からの撮影。光背は青銅の鑄造製で墨書の文様が見える)



左斜め側面からの頭部



右斜め側面からの頭部



右真横からの全景(光背は大仏本体二箇所差し込んで固定されている)



左斜め側面からの全景



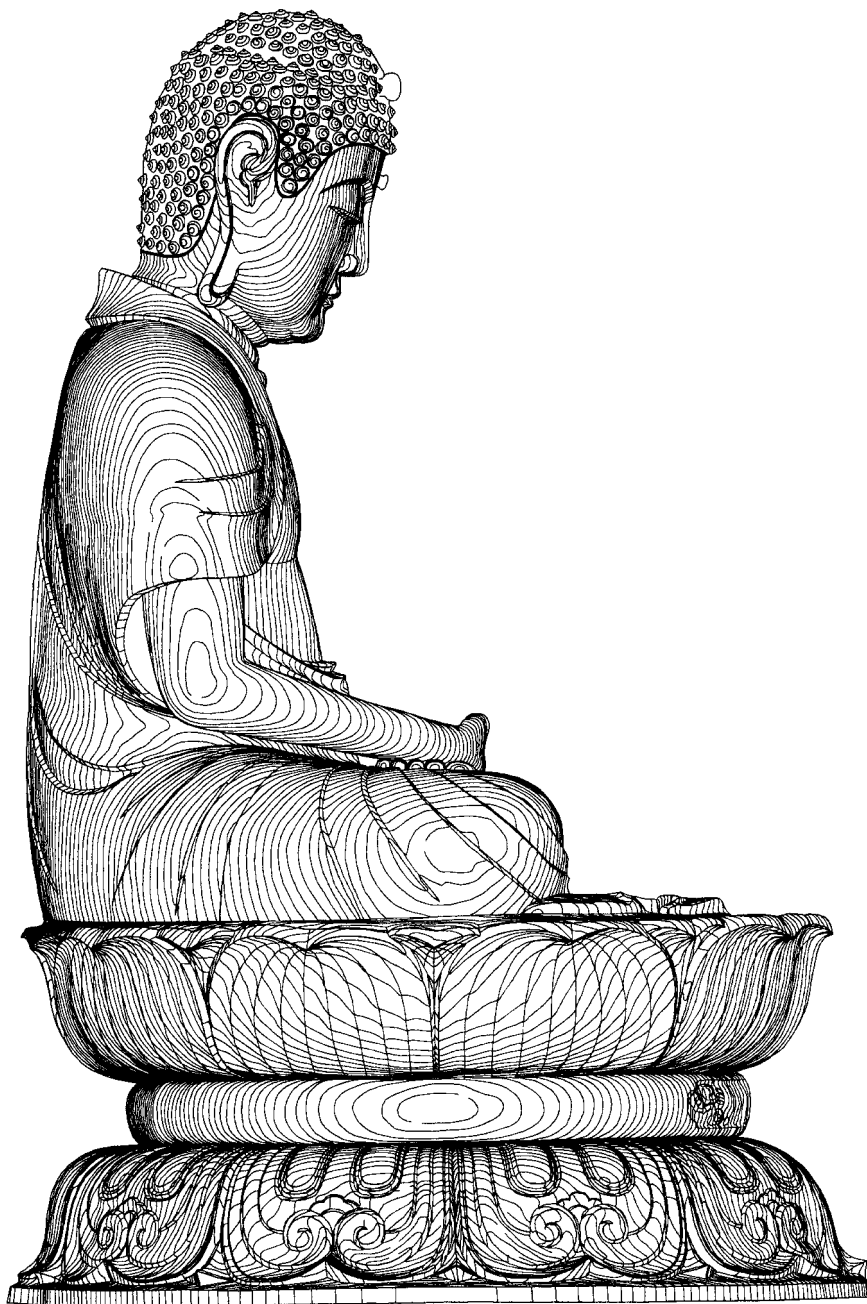
左真横からの全景(胎内へ入るための背中の扉の蝶番がかすかに見える)



武生大仏正面図



武生大仏左側面図



武生大仏右側面図



釋信曾 釋教善
釋妙順 八月廿日
釋家念安 佛
折一房 妙客 趙春
釋正尼



今 爲 妙 客 造



蓮室如年 釋尼
南小路町
高木 造



前 龍 如 見 釋 定 尼
南小路町
高木 造



中 寺 造
高木 造



先 祖 所 造
中 寺 造
高木 造

大仏胎内の埋納石